

高畠通敏教授を悼んで

高畠先生は、一九九九年三月に立教大学を定年退職後、同年四月、松本三之介先生の後任として本学法学部に赴任されました。高畠先生といえば、日本政治の計量分析を行なう一方、市民政治理論の草分けとして名をなす大御所の一人であり、本学にお迎えしたときは松本政治学を引き継ぐ新たな看板教授として大いに期待しました。実際の先生にお会いして見ますと、誠に厳しい議論を吐かれる一方で、日常的には大変気さくな、そして誰にも屈託なく笑みをかけてお話くださる誠に愛すべきお人柄でした。本学にご赴任されて四年目の春、先生は突然病魔に襲われ闘病生活を余儀なくされました。翌年、病魔に冒されながらも、古希を迎えられ、本学の特任教授にも就任されましたが、我々の祈りもむなしく、先生は昨平成一六年七月七日、七夕の日、天に召され、帰らぬ人となりました。大学を取り巻く諸情勢がかつてないほど厳しく、日々改革が迫られている今こそ、高畠先生のように研究に教育に名を博し、しかも大学行政にもご経験が豊富な先生に、もっとご活躍ご指導願いたいと思っております。それだけに先生を失い誠に残念です。

先生が本学に赴任された年の一九九九年秋、その年はまさに世紀の節目となる年でありましたが、本学比較法研究所主催の市民向け講演会で、もう一人の演者である細川護熙元首相の講演とともに、先生は「政党政治の将来」と題するご講演をされました。その中で、先生は、日本の政治になぜダイナミズムが欠如しているのか、転換期の課題を処理する能力になぜ欠如しているのかについて、現代日本の政党政治の問題点を鋭く描き出し、政権交代可

能な政党システムのあり方、政党の大衆組織の確立を可能にするための方策について、専門外の市民の耳にも十分届くように、実に丁寧にしかも確信に満ちた情熱で講演されたのを今も鮮明に覚えております。

また、先生は一昨年一月、退職される法学研究科長本間浩教授の後任として、次期研究科長予定者に選出されました。ときあたかも本学が法科大学院の設立を構想する折柄、先生は、四月に新研究科長に就任されるまでのわずか二ヶ月の間に、お一人で法科大学院設立後の新しい大学院のあり方を研究され、本学にふさわしい新たな大学院のコンセプトとカリキュラム構想をまとめられました。

しかし、まとめられて四月にいざ新構想を実施に移そうという直前の三月末、先生は突然、最初の入院を余儀なくされ、新研究科長就任を辞退されました。先生のご無念はいかばかりであったかと存じます。結局、新大学院は、最初の構想とは幾分違うものになりましたが、紆余曲折を経て、本年四月、文化情報学研究科とタイアップしてのユニークな現代情報文化研究科の設立に漕ぎ着けることに成功しました。設立までに至る二年間、法学研究科の教員スタッフがこれだけ新大学院設立に向けて真摯に議論し、エネルギーの多くを割くことができましたのも、ひとえに先生の最初の構想が土台にあったからこそ、今更ながら先生には感謝申し上げる次第です。

さて、先生の学問と成果につきましては、本誌に掲げる高島通敏先生の業績目録を見る限り、綺羅星のごとく輝いています。加えて、一周忌に当たる今年の夏休み前、ご令室の美恵子夫人より、先生の遺稿集とも言うべき『現代における政治と人間』（岩波書店）が届けられました。それは先生の近年における四つの講義・講演を収める構成になっていて、「本書自体が、高島さんの生前の肉声を聞くように」（栗原彬解説）まとめられており、読めば確かにユーモア交じりの先生の歯切れのよいお声が懐かしく響いてくるものでした。

「語りの名手」（同上栗原）であった高島先生。先生は書齋の中にとどまらない研究者でもございました。そのこ

との賛否につきましては今後の評価にゆだねますが、これについて、別途刊行された高畠通敏先生略歴・業績目録の巻末の中で、「学者、教師としてだけでなく、運動家としての側面もお持ちだった先生のお仕事振りを少しでもお伝えしたいという思いから、お付き合いの深かった新聞、雑誌社の要請でお書きになった原稿も一部、収録させて頂きました」(林昭子女史)とあります。さらに病氣を押して市民主体の企画にも最後まで参加された先生について同手記は「まことに、ご自身の“運動の政治学”を最後まで実践される日々でした」と結んでおります。

先生と我々はわずか五年有余の短いお付き合いでしたが、短いという理由で課題がないわけではありません。先生が残された知の遺産を我々は我々なりに検証し、発展させる責務があります。とりわけ本学政治学の先生を中心に高畠政治学をさらに検証し、発展させて下さることを心から期待しております。

言うまでもなく、先生がご生涯の研究を通じて構築された“市民政治論”は、肉体は滅びても、これから後塵を拝す多くの研究者の行く末をずっと照らすものと信じております。その学問とご名声を一時なりとも、わが駿河台大学のためにお貸しくくださったことに深く感謝し、本誌追悼号を先生の墓前に捧げ、改めて先生のご冥福をお祈り申し上げる次第です。

二〇〇五年七月七日

法学部長

加藤 紘捷